

武蔵野日曜聖書講筈

求めよ、さらば与えられる

——マタイ伝第7章7～12節——

1989年9月17日

小池辰雄

無条件の言い方 人にして人に非ざる者 神の現象体 私自身をお前にやる キリストの方が
 ら求めてやまない 簡単になれ 神さま自らの故に 20世紀の人類はおかしい 三重の内接円
 もう成っている 永遠を生きている 十字架の門 得たものをひとに与える 満月を抱いてい
 る三日月 (詩) 嵐吹きすさぶ夜の灯台 聖霊に案内されて

【マタイ7】

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。8 すべて求むる者は得、たずぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、10 魚を求めんに蛇を与えんや。11 然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わざらんや。12 然らば凡て人に為られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。

●無条件の言い方

著作集第十巻の『聖書は大ドラマである』を自由に題材にしてお話をいたします。今日は、第十巻の「9月18日 求めよ、然らば与えられる」のところです。

「求めよ、然らば与えられる。探ねよ、さらば見出す。門を叩け、さらば開かれる。」(マタイ7:7)

これはマタイ伝の有名なキリストの言葉ですが、キリストは「何を求めよ」とは言っておられない。ただ簡単に、

「求めよ、然らば与えられる。

探ねよ、さらば見出す。

門を叩け、さらば開かれる。」

と、こういう無条件の言い方が素晴らしいわけです。人々によって求めるものはいろいろです。ところが、キリストが言っておられるのは、「与えられる」とか、「見いだす」とか、「開かれる」とかいうのは神さまがなさっていることです。神さまが与えたもう。神さまが、



探ねれば見いだすようにしてくださる。神の門を、天国の門をたたけば、必ず開かれる。そういう決定的な内容が本当は土台になっているわけです。けれども、いろいろな人がいますから、

「とにかく、求めてごらん。求めがよければ、きいてやるよ」

という広い気持で、一般にはそういう面ももって語られたと思う。私たちは誰でも何かを求めて動いている。探究心がなければ、文化も文明も展開しないわけです。小さい人は小さい人らしいものを求めるし、小学生、中学生、高校生、また我々、職にあるひと、いろいろな人の求める内容はそれぞれです。けれども、求めて限りなく与えられるもの、限りなく見いだすもの、また、どこまでも開かれていくもの、そういったものは実はこの地上にはない。

●人にして人に非ざる者

お釈迦さんも一生懸命に求めました。生老病死の四つの問題がそのきっかけになったと、学者によつてはいろいろなことを言いますが、確かに、そのきっかけとなったでしょう。素晴らしい王家に生まれ、またいい奥さんがいた——大変な美人だったそうですが——それも妻に子供が一人できた。そして、それを捨てて行く。人生の、また世界の問題に對して探究しようというので家を捨て、国を捨てた。アブラハムも家を捨て、家郷をすて、神の聲に従つて動いていきました。

お釈迦さん、釈尊はゴータマ・ブツダという。「ゴータマ」という名は「美しい牛」という意味だそうです。「ブツダ」というのは後からつけられた名で——ちょうど「キリスト」が、抽象名詞が固有名詞になったように——「悟りを開いた者、真理を身につけた者」という意味で、それがお釈迦さんの名前みたいになってしまった。「佛」というのは、「人偏に非ず」と書く。佛というのは「人に非ず」という意味で、いわゆる普通の人ではないというのが「佛ブツダ」ということです。キリストも正に佛なんです。人にして人に非ざる者です。

地上におけるキリスト・イエス、地上におけるお釈迦さん、これには限界がある。そのことは、キリストもお釈迦さんも知っている。だから、イエスは

「私が向こう側にいくことがお前たちには本当に益となる」

と仰つた。ということ、この地上において彼が弟子たちと一緒に御飯を食べ、一緒に歩いて、弟子たちはいろいろ教えも受けとつたけれども、

「お前たちは躓^{つまず}く、今に私を捨てるよ」

と、ちゃんと分かちておられた。

「けれども、天界にいつてから、やがてお前たちを本当につかまえるぞ」というわけです。



● 神の現象体

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書のキリストはもの凄いかたです。神の現象体です。だから、私がいつも言っているとおりに、このキリストに降参するまではその世界に入れない。そのキリストが天国を現しながら歩いておられた。しかし、天国を現しながら歩いておられたが、どんな奇蹟をなさつても、それはみんな本当の世界の徴しるしです。徴において永遠なもの普通は見ることができない。だから、御利益教ごりやくみたいになつてみたり、いろいろつまずくわけです。大衆は大体それで躓いてきました。弟子たちも躓いた。

ということ、この徴において、徴の奥のキリスト、霊界のキリストを見る。徴をとおしてキリストに入っていけば本ものになる。ところが、これが地上ではみんな落第してしまう。我々は、クリスチャンもとかくその落第を、やりそこないをやっているわけです。

● 私自身をお前にやる

「求めよ」とキリストが言われるときに、キリストの方では、

「私は本ものをやるぞ。私自身をやるぞ」

と、キリストは

「私自身をお前にやる」

と言われる。そのことを後で使徒たちは本当に受けとった。

パウロなんていうのは一番、キリストに逆らっていた男です。それが復活のキリストにひっくり返されて、

「我が目より鱗うろこの如きもの落ちたり」(使徒行伝9・18)

となった。それからキリストを本当に求めて、キリストと一つとなった。「エン・クリスト(キリストの中に)」という現実をパウロは本当に自分のものにした。我々は本当にキリストを求めて、失敗することはないわけです。

「私の求め方がまだ足りない」

とか、そういうふうに思うかもしれないけれども、そうじゃない。今日は皆さん、その点をはっきり受けとっていただきたい。我々は実は、いくら求めたつてだめなんです、人間的な気持の求めでは。

「まだ私は求め方が足りない」

と、すぐそういうように相対的に思うわけです。キリストというのは、人間的な力りきみや、ただ探求で得られるようなものではない。むしろ、「求める」ことに絶望する方が本当は「得られる」といってもいいくらいなんです。

● キリストの方から求めてやまない

キリストは



「求めよ、さらば与えられん」

と言っておられるけれども、我々が「求める」ということよりも、

「キリストが与えようとしている力の方がはるかに素晴らしい」

ということに気が付いてもらわないと困る。

「こちら側がどうか」

ではない。

「私の在り方が、私の信仰がと、そんなものをいつまでも問題にするな。あるがまま、

キリストの中に自分を投げ入れろ」

ということ。これが本当の求めなんです。あるいは、そこにぶつ倒れてもいい。ぶつ倒れたら、キリストは抱きあげてくださる。それほど、キリストは決して捨てない。人は捨てます。親友だった人が背いたり、人間の関係はいろいろなおかしなことになる。しかし、どんなになつたって、人間関係よりもっとも大事なのは、このキリストとの関係です。

「私がお前の足の泥を洗うために、私はやって来た。もし、そうでなければ、

お前は私と関わりがない」

という有名な「洗足」(ヨハネ13・8)の話がありますね。我々とキリストとの関わりは、キリストの方から関わってくださいっている。どこにいても太陽の光は私たちを照らしてくれる。空気は、どこにいても私たちを囲んでくれる、私たちの身体の中に入ってくれる。そのように、キリストの方から求めてやまない。向こうから、私たちを探してやまない。私たちの心の扉を叩いてやまない。キリストの方から求めているし、また、

「お前はどこにいますか」

と尋ねている。心の魂の扉をたたいておられる。そのことに気がつけば、

「そうか。こちら側の何ものでもなかった」

と、もうこれで人生観は完全にひっくり返る。

「キリストの力をもっと自分に働かなければならない」

とか、こちら側から考える必要はない。キリストの力は働いてやまないんです。光は射して、貫いてやまない。私はそのようなところに来てしまったものだから、楽でしようがない。ありがたくてしようがない。キリストに圧倒されて生きています。

「こちら側がどうである」

なんて、そんなことはもはや問題にしなくなった。問題にしたって始まらないから。

●簡単になれ

だから、

「主よ、まー」

という一言です。キリストは神さまのことを



「父よー」

といって祈った。キリストの生き方というのはこの一言なんです。いつも神さまの中に入ってしまったって、「父よ」とキリストが叫べば、直ちにキリストと神さまは一つになっている。私たちが「主さま」と一言、全身をもつて叫べば、直ちにキリストの中に入る。だから、「求めよ」とは

「私に叫び入れ」

ということですよ。そうしたら、必ずキリストは自分自身を与えてくださる。それを祈りの世界で体験してくださいよ。ゴタゴタ祈る必要はないんだ、本当は。「主さま！」の一言でいい。私はこの頃もう簡単になってしまった。

「ひるがえりて幼児おさないの如くなれ」

というのは、

「簡単になれ、理屈はいらんぞ。もう、お前は——過去・現在・未来のお前は——完全に私が十字架で贖ったんだから心配するな」

ということですよ。

●神さま自らの故に

第十巻の「8月2日 雲散霧消の贖罪」の項に、

「ヤコブよ、汝を創造したエホバ、今こう言い給う、イスラエルよ、汝を造つた者今こう言い給う、恐れるな、我は汝を贖つた、我は汝の名を呼んだ、汝はわが有ものである」(イザヤ43・1 私訳)

もう、神さまはただみかけて上から言っているんです。

「我こそは我自らの故に汝の不義を消し汝の罪を心に留めない」(イザヤ43・25

私訳)

これは素晴らしい言葉です、新約にもないような言葉です。

「我こそは我自らの故に」

であって、「お前のために」ではない。

「神さま自らの故に汝の不義を消し汝の罪を心に留めない」

という。こんな絶対の世界がありますか。神さまの世界です。ですから、この世界を本当に受けとったら、もう自分の罪なんか問題にしなくてよろしい。

「汝はわが僕。イスラエルよ、我は汝を忘れない。我は汝の不義を雲の如くに消し、汝の罪を霧の如くに散らした。汝われに回帰せよ、我れが汝を贖つたのだから」(イザヤ44・21～22私訳)

「悔い改め」という言葉がこの

「回帰せよ、帰ってこい」



の回り帰るといふことです。私はイザヤ書のこの言葉が大好きです。この言葉に神の救いの、キリストの救いの本領がある。

●20世紀の人類はおかしい

20世紀の人類はおかしいです、いろいろな変てこな事が起きている。このままで行ったら、もう21世紀には人類はおかしくなってしまう。これは神さまとの関係が切れてしまつて、キリストが相変わらず十字架に架けられている。だから、私たちは上からいただいた烈々たる気魄をもつて、このような間違つた、神に背いている世界に対してはつきりとキリストに在つて戦う。なにも、力む必要はない。キリストが来てくださるから、もの凄い力ですから。お釈迦さんがどんなに偉くたつて、キリストにはかなわんです。これはもう、キリストはけた違いなかたです。

「求めれば、必ず私自身をやるよ」

というこのキリストに、

「主やまー」

と叫び入れということ。なにも大きな声を出さなくたつていい。全存在をもつて、沈黙の叫びというのがある。そうしたら、もうキリストに捕まえられて、圧倒されてしまう。キリストは与えようとしている。太陽の光は入ろうとしている。窓を開ければいいんだ。

「探ねよ、さらば見いださん」

と。いつでも私の前に後ろに横にキリストは霊をもつて来てくださっている。聖霊のキリストは、キリストは聖霊としては、超在し貫在し内在し遍在し、いたるところに居たもう。だから、

「私は天界に往つたら、聖霊となつてお前たちに自由自在に現れるぞ、やつて来るぞ、力を与えるぞ」

というわけです。お釈迦さんも如来となつてから、万人を慈悲をもつて憐れむという。キリストは神さまの愛を一人びとりに自分を通して与えようとしている。

間違えては困るよ、仏教の世界では愛を禁ずる。あれは「愛欲」の愛なんです。キリストのいう愛は、もし仏教でいうなら、「慈悲」の角度です。憐れみの愛、人を助ける愛です。神の愛は人を助ける愛なので、自分でもつて何かそれで得するような、エゴイステイックな愛ではない。

●三重の内接円

だから、

「どこでも探ねてごらん、ここに居るではないか。我は汝のそばに、いや、汝の中に居るではないか」



と。「神・キリスト・我」という三重の内接円です。これはみな聖霊の世界です。どうぞ、皆さん、そういう簡単な信仰の世界をいよいよ身をもって証してください。

「証しできません」

ではない。必ずできる。イザヤ書で読んだように、

「今、ここに於て」

という世界だから。

「門を叩け、さらば開かれん」

この門は私がいとも書いているとおり、十字架という門（門構えに十の字）です。

「我は門なり」（ヨハネ10・9）

という。

「私の門は十字架だよ。十字架の下に来てごらん。その先は詩篇23篇のような素晴らしいところだ」

と。この現象界、この仕方がない世の中において——これは穢土えどだね——そこを天国として歩くことのできる人はキリストを本当に内に宿しているひとです。キリストは、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書で天国を現しながら歩いておられた。我々もそれを現じて歩いていく。どんなに暗い所もキリストの光でそこを明るくしてしまう。

●もう成っている

もう自分の信仰なんて、そんなことを考えるのはよしましょうや。キリストだけですから。

「まだ、まだ」

なんて、いつまで言っているんですか。「まだ」ではない、もう始まっているんです。ちゃんと来ている。いいですか。

「私はそうになりたい」

ではない。もう成っているんです、その世界が。「なりたい」なんて言っているうちはだめですから。「なっている」ということは、恵みを完全にいただいている、恵みに圧倒されているという世界ですよ。

「自分の力でなりました」

ではない。どうぞ、そういうようにして、この十字架という門に体当たりして、そこにぶっ倒れてしまう。ぶっ倒れると、この門は開かれて、向こうの詩篇23篇のような世界に入る。だから、非常に楽しいんです。

「求めよ、然らば与えられる。」

探たずねよ、さらば見出す。

門を叩け、さらば開かれる。」

は全部、内容はキリストです。主体がキリストであり、内容もキリストである。キリスト



だけ。そのためにキリストは天界に行かれて、聖霊を降くだしてくださったんだから。「聖霊とは何ですか？」

なんて、そんなことを聞く必要はない。十字架の贖いですつとばされていれば、もうそこには聖霊は必ず来るんだから。私は無教会にいた頃は「聖霊」なんて言ったって、さっぱり訳が分からなくて、長いことただ「十字架、十字架」と言って観念的だった。それが、御霊が来てしまった。それはやつぱり捨身で祈ったからです。自分を投げ出して祈ったから。「祈る」とは「自分を投げ出す」ことの他にものでもない。

9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、10 魚を求めんに蛇を与えんや。11 然らば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わざらんや。

「善き物」は、ルカ伝には「聖霊」と書いてある。

「汝等のうち父たる者、たれか其の子、魚を求めんに、魚の代りに蛇を与え、卵を求めんに蠍さそりを与えんや。さらば汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。まして天の父は求むる者に聖霊を賜わざらんや。」(ルカ

11・11～13)

「善き物」は即ち「聖霊」です。聖霊なるキリスト、キリストの聖霊。言い方は何でもいんですよ。

もう20世紀はギリギリのところに来ている。この美しい地球をこんなにそこなっているのは人間の罪です。世界中がおかしくなっているから、本当に原始の福音の世界に、使徒たちの信仰の世界に立ち返らなければだめだ。他人のことではない。あなた方一人ひとり、一人の人が何万人を本当に支えるか、分らないくらいな力を持っている。いいですね。男にかかわらず、女にかかわらず、そういう世界を是非とも、あなた方一人ひとり証していただかなければ。

● 永遠を生きている

お釈迦さんの弟子のアーナンダというのがお釈迦さんにやはり、

「永く居てもらいたい」

と言ったらしい。ところが、お釈迦さんは

「私は一劫ごうくらいは居るかもしれない」

と答えたそうだ。「劫」というのは大変な年数なんです。

「けれども、いつまでも一緒にいないよ」

と言った。ということはお釈迦さんは向こう側にいったら、今度は本当に如来としてやって来る。「如来」とはキリストの再臨みたいなものだ。仏教の世界も、そのような万人救済のところに行くには、お釈迦さんは向こう側に行かなければだめだった。キリストも、



「向こう側に行かなければだめだ」

と。天界を、絶対界を、永遠界を現象界において生きる。でなかったら、信仰なんてつまらないですよ。

「私は永遠を生きています」

と、はっきり言えるようにならなくては。救いというのは、そこまでいかなければ本当の救いではない。

「まあ、地上は仕方がないから、向こう側にいつてから永遠に」

なんて、そうじゃないんだ。もう今から、今日から一日を永遠として生きる、永遠の質をもたなかったら、本当に生きるということではない。ゲートルという大詩人が、

「我らは神の中に生き、動きまた在るなり」（使徒行伝17・28）

という言葉が非常に好きだったのは、彼はやはりそういう境地をもっていたからです。

●十字架の門

『著作集第十巻『聖書は大ドラマである』の「9月18日 求めよ、然らば与えられる」の項を読みます。

「キリストの言は断言的、無条件的である。聖霊の権威と愛に因っているからである。だから、求める方も全的な全身を以てする体当たりの求めでなければならぬ。第八節で畳みかけてキリストは断定しておられる。いったい何を求めればいいのか。何でも好いらしい。ただ私心慾心の求めではダメである。生命がけの求めでなければならぬ。何でもいのちがけなら得られる。しかも求めの究極のものはキリスト自身である。キリストを祈り求めるのである。するとキリストは自分自身を全的に与え給う。これほど確かなことはない。キリストを得ることはキリストの有となることである。そうすると我々の側の個々の求めの内容が神・キリスト中心となって私心なき求めとなり祝福される。

今度は何を求めても、それは本当に神さまに役に立つような求め方になるわけですね。

だから何はさて置きキリストを祈り求めることだ。キリストに祈入する、帰入するのである。それは全身をキリストの中に投身することなのである。キリストを探ねればキリストは其処に身近に居られる。燈台下暗しであるから燈台の中に入ればよく見える、難破しそうな船も。そして助け舟と自分がされる。キリストという十字架の門に体当たりするのが「叩け」である。必ず開かれる。自分は門の下にぶっ倒れる。キリストが起してくださる。聖霊の力を与えてくださる。「在天の父は求むる者に善きものを賜わざらんや」（7・11）とある。「善きもの」とは「聖霊」のことである（ルカ11・13）。聖霊は何ものにも替えられない。」



●得たものをひとに与える

こういうわけです。それで、求めて得た。探ねて見出した。叩いて開かれた。そうすると今度は、得たものをひとに与える人になる。そこまでキリストは言っておられないけれども。人を見出して――人においてキリストを見出すこともできるし――人を見出してそれを救いにもっていくことができる。人の魂の門を開くことができる。そのように、与えられると、今度は、与える側になるわけです。即ち、キリストが私たちの中で生きたもうから、そういうことになつていくわけです。それが本当の

「恵福さいわいなるかな」

なんです。本当のさいわいは、人を助け、人を生かし、人を救うことが本当の恵福だから。いわゆる世間で言っている「幸せ」なんていうのとおよそ違う。これはもう本当です。天国をそこに現じていくことが一番さいわいなことだからね。そういう恵福の内容を、本当はキリストはそこまで仰りたかつたわけです。あまり一度にいろいろなことを仰らない。

「然らば汝らの天の父の全まったきが如く、汝らも全かれ。」(マタイ5・48)
というのはそのことです。

「汝らの父の慈悲なるごとく、汝らも慈悲なれ。」(ルカ6・36)

という。キリストの力強い愛がやってきて、これが人に作用せざるを得ない。愛の力です。力ある愛だから、相手をどしどし救いあげていく。

一人の魂がそういうように救われるのを見ることほど、私にとってうれしいことはありません。伝道をなぜやらざるを得ないかというと、そういう喜びのゆえにやっているわけです。もう来年で50年になる。

そろそろ、あなた方にバトンタッチしますよ、全然伝道しないというわけではありません。んけれども。一対一の伝道をやらざるを得なくなる。本当に求めるものを知らないでいる人がたくさんいるんだ。だから、是非お願いしたい。

●満月を抱いている三日月

要するに、キリストと一つになれば、何も心配はいらん。世の中は問題だらけだ。問題だらけでも、そんな問題には全部勝てる。また、相手がサタンに囚われていたら、

「サタンよ、退け!」

というわけで、追い出すことができる。

心配と思ひ煩いはバカらしいことです。キリストに在つたら、そんなことは一つもいらん。その権威は、本当にキリストの前に平伏す魂に来るんです。

「自分はだいたい霊的になつた」

とか、

「だいたい自分の信仰は本ものになつた」



とか、そんなことは一つも考えることはない。私はしょっちゅう、無だ。ゼロだ。小池はキリストの十字架でゼロにされたから、ゼロで割られると、聖霊の世界は無量無量だといふわけです。イエスは自分を神の前に完全に委ねて、自分を何ものともしなかった。

「霊の貧しき者」

とはこのことです。

「恵福なるかな、霊の貧しき者、天国は

即ち神さまの支配したもうところは

その人のものなり」(マタイ5:3)

とはキリスト自身の告白です。「恵福なるかな、霊の貧しき者」とは、自分を何ものともしないということ。私は何ものでもない。肩書も何も、ひとつもいらん。相対的な肩書はあつよ、そんなものは問題じゃない。

「ゼロ＝無限大」

これは無限大の質です、量的に無限大ではありませんよ、我々は。みな相対的な人間だから。質的には無限大になる。それが「全さ」ということです。

「満月を抱いている三日月」

なんです。これは三日月でありながら、完全性(満月)なんです。地上では三日月です。我々はこういう存在です。我々はお互いに三日月です。そして、それぞれの、A君はA君らしさを、B君はB君らしさを持ちながら、キリストに即するわけだ。一人びとりは天下一品だから、ひとつも全体主義ではない。一人びとりが例外的だ。キリストの中に本当に入る。そういうことでもって我々は進んでいく。

もう非常に簡単なんです。あとは、聖書の言葉を読みながら、その言葉の現実に入ることだけ。聖書を読むということは御言の現実みことばに入るということです。御言の現実に入るためには、祈り心で読んでないと入れない。入ったら、もうそれでたくさんだ。たくさん読む必要はない。

まあ、皆さんは、私の話を聞きながら、その世界にお入りになりつつあると思います。非常にうれしいです。

●(詩) 嵐吹きすさぶ夜の灯台

こんな詩がどこからか出てきた。私は前にこんな詩を書いた。1974年12月7日作。

嵐吹きすさぶ夜の灯台

群雨襲つたべの雨傘

雪に暮れゆく夕べの宿屋

陽に焼きつく真昼の木陰

そういう人でありたい。



春の野路の草花

夏の谷間の清水

秋の山路のもみじ

冬の星空の暖炉

そういう人でありたい。

サタン襲わば聖名を呼び

誘う者を相手とせず

欺く友あらば祈ってやり

背れゆく友あらば危ないと言

ためらう人あらば勇み立たしめ

疑う者あらば御霊の力を語り

認めぬ者あらば放っておき

蔑む者あらばみ審判に任せ

誤解されても弁解はせず

パリサイ根性と戦い

偽善者を相手とせず

迫害する者を担い

原始福音の力を示し

使徒の信に生き貫こう

そういう人でありたい

疲れた者と共に安らい

病める人には魂の医者となり

苦しめる者に魂の愛を示し

求める者に福音を語り

一切の事態にただ主の僕となって

御霊の証者となって生きよう。

全存在を投じて本日

一生として生き

今日を永遠に変え

明日もまた進み行き

主に在って往生し

聖名をほめ讃えん。

アーメン ハレルヤ!



●聖霊に案内されて

キリストの福音の世界に在ると、パウロを読めばパウロがうれしいし、ヨハネを読めばヨハネがうれしいし、ヤコブを読めばヤコブがうれしい。何でも受けとる。しかもまた仏教の偉大な坊さんのものを読めば、それをみなキリストの光でもって掴むことができる。なんと、東西を本当に融合することのできるのは、このキリストの霊の光をもつことです。それだけの大きな福音であります。福音はそれ以下のものではない。

「さあ仏教にしようか、キリスト教にしようか、なんて何を言っているか。キリストを本当に掴まえてみる。お釈迦さんでもみんなその中に入ってしまおうぞ」

と、それくらいのことを――私は仏教徒には言いませんけれども――それだけのものをキリストは持っています。本当にイエス・キリストは宇宙大の方ですから、大変なケタがこの方ですから、どうぞ、圧倒されて生きてください。

寝るときに、

「主さまー」

と言って寝てごらん。必ず眠れるから。それで眠られなければ、本当に主さまの中に入っていないからだ。絶対の世界に入ると、キリストは一切を持っていらっしゃるから。

ゲーテやダンテは、マグダレーナとかベアトリーチェなんていう女性に案内されたりいろいろしているけれども、私は女性に案内されない。私は聖霊に案内されている。聖霊に案内されて旅をする詩人なんていうのは、世界に他におそらくいないでしょうね。これははつきり証してやるから。

